

万里集九詩の「紅雨」

中 本 大

はじめに

万里集九（二四二八）不明）に、「繡桃花」という詩題の七絶がある。

為駐桃花三月姿 桃花三月の姿を駐めんが為に

美人細意染游絲 美人意を細やかにして游絲を染む

風吹猶未作紅雨 風吹けど猶ほ未だ紅雨を作さず

綉出劉郎去後枝 綉ひ出だすは劉郎去りて後の枝のみ

「上巳後五日、会尾長光寺（上巳後の五日、尾の長光寺に会す）」という詩題注が付されたこの作品、三月五日、後に織田信長ゆかりの寺院として知られることになる名刹、尾張稲沢の臨濟宗妙心寺派興化山長光寺に滞在中の詩会で詠じられたことが知られる。『五山文学新集』（東京大学出版会・一九七二）第六卷所収

「万里集九集解題」に拠れば、この詩を収める京都大学文学部日本史研究室所蔵『五山禪僧詩文集』では、文明十三年（一四八一）上巳の詠作「花下留客 尾州湊台長興寺辛丑上巳会」の次に掲載されているという。同書は編年配列と考えられるため、文明十三年の詠作と判断して差し支えないと思われるものの、詳しい制作経緯は不明である。

美人図を題材にした作例は、五山学僧の別集や絵集を披けば、容易に見出すことができる。もとより晚唐詩を愛し、閨情詩に親しみ、少年僧を美女に見立て、艶詩を贈ることを常套としていた五山僧にとって、仕女図や宮女図に関わる表現が詩囊に収められたのは必然であった。実際、『翰林五鳳集』を一覧しても、「美人折花図」・「美人簪花」・「美人撲蚩図」・「美人睡起図」・「美人困碁図」・「美人読書図」・「美人拈筆図」などの詩題を見出せるのである。しかし仕女図の定番で、現存絵画作例も多い「刺繡」に材を取った漢詩は、禪林では決して多いとは言えないだろう³⁾。万里が参加した尾州長光寺の詩会で、この詩題が選択された経緯も興味

深いものの、注目すべきは万里詩の措辞である。「刺繡された桃花」から万里は何を思い巡らし、何を紡ぎ出したのか、検討してみよう。

万里が詠作に際して、依拠した作品の一つが、杜甫の「白絲行」であった。その第四聯、

美人細意熨貼平 美人意を細やかに熨貼平らかにして
裁縫減尺針線跡 裁縫減し尺くす針線の跡

傍線部の表現を利用したのである。自身の落魄を慨嘆し、「君不見才士汲引難、恐懼棄捐忍羈旅（君見ずや才士汲引せられ難く、棄捐を恐懼して羈旅を忍ぶを）」の一聯を以て閉じる杜詩に拠ることからして、万里がありふれた仕女像を造形する意図ではなかったことが窺えよう。

さて、針仕事に巧みな女丁の姿を描いた傍線部の措辞「美人細意」は、本邦禪林でも使用例が見出せる。村菴、希世靈彦（一四〇三〜一四八八）の永享元年（一四二九）の詠作、「繡榴花」詩がそれである。

繡榴花

眼裏榴花手裏針 眼裏の榴花は手の裏の針にて
美人細意繡衣襟 美人意を細やかに衣襟に繡る
絳英空落青苔上 絳英空しく落つ青苔の上
万恨千愁看不禁 万恨千愁、看るもの禁じえず

青い衣襟に繡られた榴花を、紅色の花房が枝から離れて青苔に舞い落ちる様子に見立てたこの作品、その詩題や趣向だけでなく、措辞までもが万里詩と一致しているのは、偶然ではあるまい。同じ詩題は蘭坡景菴（一四一九〜一五〇一）の別集にも確認され、ともに禪林詩会での出詠であった可能性がある。刺繡する女人の憂情は『錦繡段』「閨情」部所収、朱絳「春女怨」詩などにも描かれているものの、万里は杜詩に学んだ本邦先達の作例をも、貪欲に吸収していたのである。

さて、つづく万里詩の第三句、桃花の散るさまを「紅雨」に喩える妖艶な表現が、中唐の詩人、李賀の「将進酒」に見えることは周知であろう。著名な作品ではあるものの、以下に掲出する。

将進酒 琉璃の鍾（さかずき）
琥珀濃 琥珀濃し
小槽酒滴真珠紅 小槽の酒滴って真珠紅なり
烹龍炮鳳玉脂泣 龍を烹、鳳を炮（つつみや）きして玉脂

泣く

羅屏繡幕困香風 羅屏繡幕香風困む

吹龍笛 龍笛吹き

擊鼉鼓 鼉鼓撃ち

皓齒歌 皓齒歌ひ

細腰舞 細腰舞ふ

況是青春日將暮 況んや是れ青春日將に暮れんとし

桃花乱落如紅雨 桃花乱落紅雨の如し

勸君終日酩酊醉 君に勸む終日酩酊して酔へ

酒不到劉伶墳上土 酒は到らず劉伶墳上の土

第十一句傍線部がそれである。この楽府題は李白の同題作とともに『古文真宝』前集「長短句」類に収められており、本邦禅僧も親しんだ作品であった。『花上集』所収、瑞溪周鳳（一三九二〜一四七三）「桃花蒼鷹図」詩の結句「紅雨飛辺也動心」を注釈した『花上集鈔』（国立公文書館内閣文庫所蔵）においても「桃ノチルヲ、紅ノ雨ト申シタソ……中略……見ルヤ桃花乱落如紅雨」として李賀詩に言及し、横川景三（一四二九〜一四九三）が「賞春晴」七絶の結句を「白雪梨花紅雨桃」とするのは、その証左である。

『四河入海』で知られる笑雲清三（生没年未詳）の講義を録した『古文真宝前集抄』（以下、「笑雲抄」と略記）は後集受容に偏頗した本邦禅林では珍しく、前集の講説を記録したものであるが、当該詩の傍線部分については『苕溪漁隱叢話』（以下、「漁隱

叢話」）後集を引きつつ、その評価を記している。

苕溪漁隱曰、梨花一枝春帶雨・桃花乱落如紅雨・小院深沈杏花雨・梅子黃時雨、皆古今詩詞之警句也。予嘗欲作一子亭、四面皆植花一色、榜曰四雨、顧不佳哉（苕溪漁隱曰く、梨花一枝春帶雨・桃花乱落如紅雨・小院深沈杏花雨・梅子黃時雨、皆な古今詩詞の警句なり。予嘗て一子亭を作らんと欲し、四面皆な植花一色とし、榜して「四雨」と曰う、顧るに佳ならざらんや）。

この李賀句、花を詠じた「古今詩詞之警句」の一つで、白居易の『長恨歌』や北宋・賀鑄の填詞『青玉案』からの摘句とともに「四雨」の句として挙げられていること（同じく掲げられる「小院深沈杏花雨」句は出典未詳）を万里も熟知していた。すなわち『梅花無尺牘』巻第六「雜文不分類草案次第」所収「花菴序蛇足杏隱需之（花菴序、蛇足杏隱之れを需む）」で、多少文辭に混乱はあるものの、

苕溪胡漁隱曰、梨花一枝春帶雨・桃花乱落如紅雨・小院沈々杏花雨・梅子黃時雨、皆古今之警策（ママ）。欲作一亭子、四面各植花一色。榜曰四雨。顧不佳哉。老丈之愛花。着苕溪工夫……後略（苕溪胡漁隱曰く、梨花一枝春帶雨・桃花乱落如紅雨・小院沈々杏花雨・梅子黃時雨、皆な古今の警策な

り。一亭子を作らんと欲し、四面各おの植花一色とし、傍して「四雨」と曰う、顧るに佳ならざらんや、と。老丈の花を愛するや、茗溪の工夫に着せり……後略。

として引用されるのが、前掲『漁隱叢話』の当該部分なのである。万里の別集『梅花無尺蔵』を披閲しても著名な「聯句説」(巻第十六所収)の冒頭をはじめ、しばしば斯書が引用されている。『漁隱叢話』が万里の座右にあったことは間違いない。

李賀詩については、『漁隱叢話』だけでなく、『古文真宝』のよな他の文献における引用や文脈も含めて鑑賞していたと考えるのが適切であるものの、万里は実際、この「紅雨」という措辞を特に好んでいたようで、しばしば自作に用いている。

賦 楓葉送故人帰京戊戌春(文明十年)。送興彦竜赴洛。同年秋之末。自洛又入濃。信宿而去。

一別雨紅桃落時 一たび別れしは雨紅のごとく桃落つる時
 春愁吹入鬢辺糸 春愁吹き入れば鬢辺は糸のごとし
 再遊夢淡秋風枕 再遊夢は淡し秋風の枕
 又送故人楓葉詩 又た故人に楓葉の詩を送らん
 李長吉詩云、桃花乱落如紅雨。

右は『梅花無尺蔵』巻第一所収、文明十年(一四七八)の春、相国寺友社の若き俊英、彦龍周興(一四五八〜一四九二)を送つ

て京洛に赴いたのち、同年九月、再び美濃に同道したものの、彦龍は信宿、つまり二泊しただけで辞去した、その折の送別詩である。眼前の楓葉と対比されたのが「紅雨」に譬えられる桃花であり、その典拠として傍線部、敢えて自注を付してまで李賀詩の一節を挙げるのである。風に舞い散る桃花を觀賞する際、李賀詩と連関させることが万里にとって、特別な意味を持っていたことが知られるであろう。

二

万里詩の第四句は「綉出劉郎去後枝(綉ひ出だすは劉郎去りて後の枝のみ)」である。風吹けど、桃の花びらは紅の雨と散りしきることなく、縫いとどめたのは劉郎が去った後に植えられたという桃花の一枝のみであった、とするその表現の典拠は、李賀と同時代の詩人、劉禹錫の「自朗州至京戲贈看花諸君(朗州より京に至り、戯れに花を見る諸君に贈る)」詩である。この作品は、『千家詩(分門纂類唐宋時賢千家詩選)』や『唐詩紀事』・『詩話総龜』などに採録されるのはじめ、『寶治通鑑考異』や蘇軾詩などで言及され、本邦五山禅林でも人口に膾炙していた。筆禍や舌禍で左遷を経験した劉禹錫が長安に召喚された際の詠作で、再度地位を追われる端緒となったことでも知られている。

自朗州至京戲贈看花諸君 朗州より京に至り、戯れに花を

看る諸君に贈る

紫陌紅塵扞面來

紫陌の紅塵面を扞つて來たる

無人不道看花回

人の花を見て回ると道わざるは無し

玄都觀裏桃千樹

玄都觀裏桃千樹

尽是劉郎去後栽

尽く是れ劉郎が去りて後に栽えたり

「玄都觀」は長安の朱雀大街にあつた道教寺院である。劉禹錫の地方下向後に、桃花千本が植えられ、名所となつたもので、自身が朝廷を去つた後、にわかには權力を得たものが多いことを揶揄したとして、糾弾されたのであつた。この詩は後年、劉禹錫が再び玄都觀を訪れた感懷を詠じた「再遊玄都觀（再び玄都觀に遊ぶ）」詩、

百畝庭中半是苔

百畝の庭中半ばは是れ苔

桃花淨尽菜花開

桃花淨く尽き菜花開く

種桃道士今何帰

桃を種えし道士今何くにか帰る

前度劉郎今又來

前度の劉郎今又來たる

とともに劉詩の代表作となつた。唐末の孟鑿著『本事詩』にも収められ、日本でも知られた作品である。

さて傍線部、夢得が自身を、玄都觀を訪れた「劉郎（劉家の男兒）」として繰り返し自作に登場させた理由の一つが『蒙求』の

採録する「劉阮天台」の主人公・劉晨と自身とを重ね合わせることにあつた。「劉阮天台」の本邦での受容については先行研究があり、ここで贅言を弄することはしないものの、その物語を簡単に述べれば、劉晨・阮肇の二人が葉草を採るため、天台山に入ったものの、路に迷つてしまふ。傍らの桃を食べ、氣力を回復させた後、谷に下りると、川に食器や食物が流れて來たことから、集落が近いことを悟つた二人が探し歩いたところ、仙女と出会い、契りを結ぶ。仙境で至福の日々を過ごすうちに、歸心を覚え、仙境を離れると、七世の孫の代になつてしまつていた、というものである。「桃」と故地を離れ、再訪してその変化に驚く「劉郎」という共通点が詩語として撰ばれた要因であつた。

では、万里は杜甫と李賀・劉禹錫という、中国盛唐と中唐を代表する詩人の措辞や逸話を鏤めて、一詩を成したと考えてよいのであろうか。

三

万里の意図を考える上で、示唆的なのが先掲、李賀詩に対する「笑雲抄」の記述である。先に挙げた注釈に続けて同じく『漁隱叢話』後集を引きつつ、以下のような興味深い注釈を付しているのである。

復齋漫錄云、長吉以此句名世、余觀劉禹錫云、花枝滿空迷処

所、揺落繁英墜紅雨、劉李出於一時、決非相剽竊也（復齋漫録に云ふ、長吉此句を以て世に名あり、余劉禹錫を觀るに云く「花枝満空迷処所、揺落繁英墜紅雨」とあり。劉李一時に出づ、決して相剽竊するにあらざる也）。

すなわち、宋代の呉曾撰『能改齋漫録』（卷第八所載）を引用し、詩語「紅雨」が李賀と同時代の劉禹錫の作品にも見られること、しかしそれは決して剽竊などではなく、同時期に名を馳せた詩人による偶然の一致であることを指摘するのである。挙げられた劉禹錫詩の詩題は「百舌吟」で、李賀詩と同様、『古文真宝』前集に採録されている。それ以前の総集では『唐文粹』に見える程度なので、『古文真宝』への掲載を契機に、本邦でも広く知られるようになった作品と考えられる。その本文は以下の通りである。

百舌吟

暁星寥落春雲低	暁星寥落春雲低し
初聞百舌問閑啼	初めて聞く百舌問閑として啼くを
花枝満空迷處所	花枝空に満ちて処所に迷ひ
揺動繁英墜紅雨	繁英を揺動して紅雨を墜つ
笙簧百囀音韻多	笙簧百囀音韻多し
黃鸝吞声燕無語	黃鸝声を吞んで燕語ること無し
東方朝日遲遲升	東方の朝日遲遲として升り

迎風弄景如自驚	風を迎へ景を弄して自ら驚くが如し
數声不尽又飛去	數声尽きず又た飛び去り
何許相逢綠楊路	何ぞ許さん相ひ逢ふ綠楊の路
綿蛮宛轉似娛人	綿蛮宛轉人を娛しましむるに似たり
一心百舌何紛紛	一心百舌何ぞ紛紛
酖顔俠少停歌聽	酖顔俠少歌を停めて聴き
墮珥妖姬和睡聞	墮珥の妖姬睡に和して聞く
可憐光景何時盡	可憐の光景何れの時にか盡さん
誰能低回避鷹隼	誰か能く低回鷹隼を避く
廷尉張羅自不閑	廷尉羅を張るも自ら閑せず
潘郎挾彈無情損	潘郎彈を挾むも損するに情無し
天生羽族爾何微	天生羽族を生ず爾何ぞ微なる
舌端万変乘春暉	舌端万変春暉に乗す
南方朱鳥一朝見	南方の朱鳥は一朝見はれ
索寞無言蒿下飛	索寞無言無く蒿下に飛ぶ

「笑雲抄」では詩題に「此篇譏辯口讒佞之人（此の篇、弁口讒佞の人を譏る）」と注記し、劉禹錫の憤慨と、その寓意を指摘している。ここでの「紅雨」は李賀詩のような妖艶な印象からは程遠く、百舌鳥の狼藉によって心ならずも枝から振り落とされて、散り舞う花弁の描写なのである。笑雲の注記は簡素で、踏み込んだ解釈は見られないものの、第四句傍線部「紅雨」の注記として、先掲李賀詩でも引用された『能改齋漫録』を引く『召溪漁隱

叢話」後集の記事を再掲するのである。

当然、万里が劉禹錫詩の「紅雨」を知っていたのか否か、が問題となるであろう。「漁隱叢話」が万里の愛読書であったことは、既に述べた通りである。その可能性は十分想定すべきであろう。事実、『梅花無尺藏』第二巻に収められる次の万里詩は、それを裏付ける証左となるのである。

紅雨季長吉句云。桃花乱落如紅雨。

白髮劉郎去後詠 白髮の劉郎は去りて後に誹られ

春風付与野桃飛 春風付与し野桃飛ぶ

明年斯地又誰酌 明年斯地にて又た誰と酌まんや

雖聽無声欲湿衣 聴くと雖も声無く衣は湿さんと欲す

右は扇谷上杉定正の邸宅、糟屋館に招かれた太田道灌が暗殺された文明十八年（一四八六）の翌春、十九年の詠作である。詩題はまさに「紅雨」で、詩題注として李賀句が引用されるこの七絶、庇護者よりも盟友と言うに相応しかった道灌の非業の死を悼み、その喪失感を詠んだものである。ここでは李賀詩に見られる色彩の豊かさは影を潜め、二度と酒を酌み交わせない悲哀が強調されるばかりで、万里が李賀句に言及する意図は必ずしも明白ではないのである。

注目したいのは傍線部、起句の「白髮劉郎」である。市木武雄氏が『梅花無尺藏注釈』（統群書類従完成会・一九九三）におい

て「万里自身を云う」とされたのは首肯すべきであろう。道灌の

死後、その殺害の首謀者である上杉定正に慰留され、庇護されていた万里の自嘲表現と考えられるものの、その背後に劉禹錫像が重層的に投影されていることを忘れてはならない。というのも「白髮劉郎」は本邦五山禅林において、劉禹錫の「徵還京師見旧番官馮叔達（京師に徵還せられて旧番官馮叔達に見ゆ）」七絶、

前者匆匆襍被行 前者匆匆として襍被して行き

十年憔悴到京城 十年憔悴して京城に到る

南曹旧吏来相問 南曹の旧吏は来りて相ひ問ふ

何処淹留白髮生 何処にか淹留し白髮生ぜんや

を踏まえた次掲、蘇軾「送劉放倅海陵」詩に由来する措辞として認識されていたのである。¹²⁾

送劉放倅海陵 劉放の海陵に倅たるを送る

君不見阮嗣宗 君見ずや阮嗣宗

臧否不挂口 臧否口に掛けず

休誇舌在牙齒牢 誇ることを休めよ舌在り牙齒牢なりと

是中唯可飲醇酒 是の中唯だ醇酒を飲むべし

讀書不用多 書を読むに多くを用いず

作詩不須工 詩を作るに工みなるを須いず

海辺無事日日醉 海辺事無ければ日日酔い

夢魂不到蓬萊宮

夢魂蓬萊宮に到らざらん

秋風昨夜入庭樹

秋風昨夜庭樹に入る

尊絲未老君先去

尊絲未だ老いざるに君先去る

君先去

君先去りて

幾時回

幾時か回らん

劉郎応白髮

劉郎応に白髮なるべし

桃花開不開

桃花開くや開かざるや

詩題に見える「劉放」は蘇軾の友人で、熙寧三年（一〇七〇）、新法を批判したため泰州に左遷された人物である。その送別に際し、蘇軾は彼を同姓の文人、劉禹錫に擬えて再会を期したのである。この蘇軾詩について、淺見洋二氏は次のように述べる。

詩の後半部には、自分より先に都を去ってゆく劉放到に寄せる送別の情を述べる。末尾の二句は、劉放を同じ劉姓の唐・劉禹錫になぞらえている。劉禹錫は「永貞革新」に参加するも

失脚し、朗州（湖南省常德）の司馬に左遷される。後に都に召還された劉禹錫は、玄都觀の桃について「玄都觀裏桃千樹、尽是劉郎去後栽（玄都觀裏、桃は千樹、尽く是れ劉郎の去りし後に栽う）」と詠じて、久しぶりに都へと復帰したことに伴う感慨を述べた。ここでは朝廷を逐われた劉禹錫に、同じ境遇にある劉放到をなぞらえたのである。

〔言論統制下の文学テキスト 蘇軾の創作活動に即して〕

妥当な見解であろう。事実、『四河入海』でも末尾二句を、劉禹錫詩と関連付けて、以下のように注釈しているのである。

劉郎、脛云、此以下二句言、向後劉放到召還時、今新進弄權者、猶可存否。蕉雪云、劉夢得「自朗州召至京師」有「尽是劉郎去後栽」之句言、今朝用事者、昔我去後所出新進也、其後為主客郎中之時又有「種桃道士歸何処、前度劉郎又再來」之句、蓋言天子已登仙、其余昔日弄權之輩、今皆不存、唯我又再來也。刻謂、今坡所用不必分前後、然「桃花開不開」之句、似指再來之時也。

劉郎——芳云劉禹錫還京師詩「南曹旧史來相問、何処淹留白髮生」。

芳云、注曰、前度劉郎又再來、當時以為譏諷朝廷、今独取詩中劉郎字用耳。

先掲、「自朗州至京戲贈看花諸君」詩でも「百舌吟」でも、劉詩における「桃花」はその境遇や義憤を投影するアトリビュートだったのである。だとするならば、万里が先掲「紅雨」詩においてその詩題注に殊更、周知である李賀詩の一節を引用したのも、自身の慨歎を韜晦する所為だった可能性は否定できない。本来描きたかったのは、上杉定正の狼藉によつて無慚にも命を落とした道灌の無念を、劉詩の「紅雨」と重ねることではなかったか——絶海中津や惟肖得巖をはじめ、五山禅僧が畏れた筆禍の回避

に万里がどの程度自覚的であったのかは知る由もないものの、旧套表現に託し、否、隠して、劉禹錫、更には蘇軾への共感を想起させ、寓意を籠めることこそが本意であったとするのは穿ち過ぎであろうか。

おわりに

如上、万里が「繡桃花」詩において、措辞「紅雨」を用いたのは、仕女のみやびな春怨のみを描く所為ではなかったことを検討してきた。そもそも宮女刺繡図そのものが哀調を帯びる題材として五山僧に捉えられていたことは間違いないだろう。杜甫の「白絲行」でも美人が丁寧に縫製して仕立てた着物には、汚れて用済みになれば、ためらいなく棄捐されてしまう薄幸の杜甫自身が寓意されていたのである。前掲「繡榴花」を詠じた希世も「千愁万恨過花時、似向春風怨別離」(僧无則「百舌鳥一首」)を踏まえて、落花の憂いを自身の愁いの表現に転じている。希世が依拠したのが「百舌鳥」詩であったことは、万里詩を解釈する上で、大いに示唆的であろう。希世に学び、発想を更に拡張、自身の思いを表すべく、万里が見出したのが劉禹錫だったのである。万里にとつての桃花は劉禹錫の悲憤の象徴となり、「劉郎」の悲嘆は、時代を超えて蘇軾、時空を越えて万里にも共有された。そして、万里の思いが措辞「紅雨」に発露したのである。

京都の五山叢林を離れ、風浪水宿、敢えて流浪の身となった後

万里集九詩の「紅雨」

も、禅林文壇において培った漢詩文を放擲しなかった万里である。その心中に去来するものが、果たして如何ばかりであったのか。盟友・太田道灌の死後、仇敵に抑留される無力な自分自身を描くためにこそ、仕女図に託した劉禹錫像を自らの詩囊に蓄えていたとも考えられるのである。

禅林の規矩からの離脱は、必ずしも詩人の魂を自由にする契機になり得なかった可能性もある。だからこそ、一見ありふれた詩題の見慣れた措辞にも、詩僧の想いは十二分に横溢しているのである。

注

(1) 本詩は数少ない未収録作品であるものの、万里の作品は東京大学史料編纂所蔵『梅花無尺蔵』(写本)所収本文に拠り、引用の際に所収巻名を明記した。なお、本稿の訓読はすべて私に記した。

(2) 大日本仏教全書所収本文に拠る。検索に際しては花園大学国際禅学研究所のデータベース「電子達磨」を参照した。

(3) 万里の作品では他に『梅花無尺蔵』巻第一に「繡蝶」題の七絶が収められるのみである。この詩題については別稿で考察したい。

(4) 建仁寺両足院所蔵『杜詩統翠抄』(統抄物資料集成・清文堂出版・一九八〇)所収本文に拠る。

(5) 国立公文書館内閣文庫所蔵『村庵藁』上所収本文に拠る。底本は編年配列で、制作年が判別できる。

(6) 相国寺長得院所蔵『雪樵独唱集』絶句ノ二(五山文学新集第五卷・思文閣出版)所載の「綉榴花」詩本文は「多年乞巧暗持針、未綉平原奈此心、一朵榴花春已老、買絲先補破紅衾」である。

(7) 『錦繡段』「閨情」部所収、朱絳「春女怨」詩第一句に「独在紗窓刺繡遲」とあり、こうした表現が本邦禅僧の発想の源泉の一つになったと見做してよいだろう。

(8) 『古文真宝前集抄』(博文館蔵版漢文叢書第十一冊・一四一四)所載本文に拠る。以下、『古文真宝』採録本文の引用は同書所載本文に拠る。なお、「笑雲抄」の依拠本文は『魁本大字諸儒箋解古文真宝前集』、所謂、中国元代の黄堅編纂とされる系統の諸本である。今回の考察では、朝鮮版系統の『古文真宝大全』との異同については及んでいない。

(9) 参考までに万里「花菴序蛇足杏隱需之」の全文を挙げる
と以下の通りである。「明道先生云。司馬君実之言有靈驗。如人參甘草也。東坡又云。司馬公如麟鳳。不驚不搏也。二老之論豈非日之昼邪。国子監傍得故宮地。創独楽園。々中築一室。号花菴。挿以無數之雜花。春則牡丹之紫。秋則牽牛之碧。及霜雪之時。而梅独称深衣司馬。其至楽超南面王。雖云致仕齒于宰相之上。遂無恙。而寿過九十矣。余之

洛社平生之友。董杏隱迺岐陽人。而人中之羽儀。可謂鳳兮。自髣髴入漱玉怡翁師之室。天資穎達。能與人戲劇。風流籍甚。無出其右者。孜孜之學。拾螢統晷。諸老翰墨之場。称为釘坐梨。嘗游靈泉門下。掬瑞岩翁之波瀾。拳揚風月於正宗師之室。則設鑪鞴快軒機軸。一旦翻然不蹈出世之皀。攬轡於物外。就岐東釜戸之粉里。結一芽。自号蛇足。且又扁一窓曰花菴。凡培植杏仁。而為隱逸之林。其能寿者。細弁人參甘草之菓種。宜哉瑞岩翁之以花菴命焉。明道指司馬為人參甘草。坡仙指司馬為麟鳳。至今是謂口實。司馬差九分之人。南豐曾某亦九十九分之人。各欠其一。灞棘之小兒相聚曰。蛇足老丈亦十分百分之人。而今欠其一。為九分。為九十九分。其欠者一。則破戒是也。於戲持而不持。犯而不犯。持犯之至論。非所兒輩之可知且舍焉。昔誠齋曰。退之詩曰。花不見桃唯見李。因登碧落堂。隔江望之。則桃皆暗。而李独明。乃悟其妙也。老丈之見花。有具退之眼睛。茗溪胡漁隱曰。梨花一枝春帶雨。桃花亂落如紅雨。小院沈々杏花雨。梅子黃時雨皆占。今之警策欲作一亭子。四面各種花一色。榜曰四雨。顧不佳哉。老丈之愛花。着茗溪工夫。伏惟老丈結無數之花。為胸中之交。梨大棗不啻慕司馬之花菴。靈山一枝之花。不借金色之微笑。少室第一之花。不粘雪時之單伝。老丈不凋之花。秘在一菴之中。以花為号。实分之宜也。今倩画師之手。而花菴之風致画為図。以平生交友之故。使漆桶万里叙焉。厥命無乃拒乎。雖

不知花之為花来由略举其一二。祝老丈之千々秋万々歳。花
争々々始中終。子々孫々護老丈。而福祿寿并。則必編花史
之第一。」

他方、『詩話総龜』卷之六「評論門」では「舒王云、梨
花一枝春帯雨・桃花乱落如紅雨・珠簾暮捲西山雨、皆警句
也。然不若院落深沉杏花雨爲佳。」という一文を掲載し、
舒王、すなわち王安石の発言として類似の四句を挙げてい
る。前半二句は一致するものの、後半二句、王勃「滕王
閣」詩の第四句と共に掲げられる「院落深沉杏花雨」は
『茗溪漁隱叢話』が掲げる措辞と類似しているものの、完
全には一致しない。もちろん典拠未詳である。

(10) 後掲本文は『千家詩』採録本文に拠る。

(11) 田中幹子氏の「王質爛柯」と「劉阮天台」―中世漢故
事変容の諸相」（『和漢・新撰朗詠集の素材研究』第二章第
六節・和泉書院・二〇〇八）をはじめとする朗詠注受容の
観点や、項青氏「平安時代における劉阮天台説話の受容と
風土記系「浦島子」伝」（『国語国文学研究』三十二・一九
九七）や白溪氏「大江山絵詞」における漢文学の受容―
洗濯婆の最期をめぐる」（『京都大学國文学論叢』三十八
・二〇一七）などの近年の和漢比較文学的研究など多彩で
ある。

(12) 国立国会図書館所蔵古活字版（国立国会図書館デジタル
コレクション）所載本文に拠る。

(13) 「言論統制下の文学テクスト 蘇軾の創作活動に即して」
（『大阪大学大学院文学研究科紀要』・二〇一七・三）

(14) 『万首唐人絶句』第三十九卷（国立公文書館内閣文庫蔵
明代万曆三十五年刊）所収本文に拠る。

（なかもと・だい 本学教授）